

窓先生の使ひやうも面白いが子玉のもな
 か／＼振つて居る。吟誦して居ると、女兒
 の笑ひ聲が、水上に響くのを聞くやうであ
 る。師弟相肖ると云ふことが眞理なら、此
 不省の二字の使ひ方も、やはり其片影を顯
 はすものであらう。しかし淡窓先生の詩
 の方は、女兒の事を詠じ乍ら、自ら清高の氣
 味が満ちて居るが、子玉の方は、どうも才子

讀方

小蟹江浦に生じ。穴を營む蘆岸の下
 穴中寸に盈たす。自から以て大厦を
 爲す。朝には慮か
 る沙岸の崩るゝを
 夕には怕る江湖の
 瀉ぐを。物小にし
 て識も亦微なり。
 營々何を爲す者ぞ

風の處が見わて居る、是は弟子の師に及ばぬ所であらう。

四四 物小にして識も亦微なり

江村北海の詩に、小蟹を詠じたものがあ
 る、五言古詩で頗る面白い。小蟹生江浦。
 營穴蘆岸下。穴中不盈寸。自以爲大厦。
 朝慮沙岸崩。夕怕江湖瀉。物小識亦微。
 營々何爲者。といふのであるが、小蟹に託

物小にして識も亦微なり

して、群小の胸中を寫したものと見わる。自分の身體が小であるから、居る所の穴も小である。小穴に住して居るから、見識までも小である。朝夕憂ふる所は、沙岸の崩れる事と、江湖の浸入とのみである。こんな心配で一生を終るとすれば、蟹も亦哀れではないか。然かし乍ら一步退て我胸中を省察すれば、自分もこんな心配を持して

は居らぬか。それを思へば、忽せにせられぬものは精神の修養である。先きの猿猴捕月の詩や、此小蟹の詩の如きは、時々吟誦して、精神の修養とするがよいと思ふ。詩に益のある所は、厳格な教訓でなくて、悠々自適の中に、覺えず教訓を得る點である。先生の前に呼びつけられて、窮屈な道德の話を聞くよりも、古人の詩を玩味して、自適

の中に教訓を受けろ方が、人の心に浸潤し易いと思ふ。

四五 模糊の二字

是は宜園に流れを汲んだ人は、誰も知て居る話であるが、宜園の近邊に、大原山と云ふ山があつて、此處に神社が祭られてある。或時宜園の塾生が打揃ふて、此大原山に遊んだ。其時の感想の詩を、塾に歸て淡窓先

生に御批評を願ふた。然るに一書生の詩の結句に、大原山下買模糊といふのがあるので、先生も其意を解し兼て、作者の書生を呼んで、其作意を尋ねた所が、かの山の麓にて、餅を買ふて食べた事ぢやと云ふ。そこで先生が申すには、模糊とは雲烟模糊と云て、烟や雲がぼんやりと棚引て居る光景で、決して餅の事ではないと申された。其時

の書生の返答が面白い。糶糊といふ字が二字共に米扁であるから、小生は全く餅の事ぢやと思ふて居ましたとの事である。罪のない面白い話である。

四六 是れ尋常の詩人に非ず

唐の玄宗皇帝は、錦繡の衣服を焚て、奢侈を禁すべき事を示し、晋の武帝は、雉頭裘を太極殿の前に焚て、奢侈を制すべき事を示

讀方
天地何の邊か聖軀

した。然るに兩帝共に奢侈のために國家を覆へした。奢侈の人心を溺らすことは實に怕るべきものがある。充分に注意してさへ惑溺するものを、注意もせず修養もせず、飲めや歌へや欺むけやで、一生涯を送るもの、終りを全ふするあらば眞の幸福である。賴三樹の詩に、題笠置潛幸之圖といふ七絶がある。天地何邊容聖軀。滿山風

是れ尋常の婦人會非ず

を容れむ。滿山の
風雨御衣濡ふ。宴
安苦しみを忘る中
興の口。遺恨人の
此圖を献する無し

修養詩話

雨御衣濡。宴安忘苦中興日。遺恨無人獻
此圖。と云ふのである。豈獨り古の帝王
のみならんや、吾人も亦時々此詩を誦すべ
きである。予は此詩を讀んで、賴三樹の尋
常一様の詩人に非ざるを知り得たり。

四七 俞曲園の詩眼

清朝の大儒俞曲園が、日本人の詩を選ん
で、『東瀛詩選』といふ書を著した。選ば

れたる詩人百數十人、詩四千五百餘篇、四十
四卷といふ浩瀚なものである。去年の夏、
曉烏君が東京市中で、古本を買得て送て呉
れた。御蔭で日本人の詩の秀絶なるもの
を讀み得た。然かし惜いことには、予の手
に在るものは、第二十三卷、廣瀬旭莊の詩ま
でである。中に於て俞氏は、駿河の人山梨
治憲と、廣瀬旭莊とを以て、日本詩人中の巨

俞曲園の詩眼

擘と指定してある。然し其稱讚の言辭の上、自から差別があるから、或は旭莊を以て首位としたものかも知れぬ。其評を紹介すれば次の如くである。山梨治憲字元度、才藻富麗氣韻高邁、在東國詩人中、當首屈一指とある。また旭莊に就ては、次の如く評してある。廣瀬謙、字吉甫、號旭莊、才氣橫溢、變幻百出、長篇大作、極五花八陣之奇、吉甫、

終生不入仕途、所親則墨客騷人、所好則江山風月、宜其爲東國詩人之冠也とある。此調子で見ると、或は旭莊を以て第一位としたのかも知れぬ。しかし人には各其長所がある、長篇大作は、實に旭莊の獨得の手腕であるが、七律は、或は山梨治憲が上手かも知れぬ。旭莊の詩は、大抵の人は知て居るから、今山梨氏の七律を二三首紹介して見や

讀方

山行
勝を探り行き行いて疲
るゝを覺ゆす。山間の
石路自ら透迤たり。林
衣紅は染む霜の過ぐる
後。松蕈香は來る雨の
霽るゝ時。人は斷崖に
倚て谷響を聽き。猿は
垂蕨を攀て寒枝に透る
偏へに喜ぶ幽境秋更に
好きを。寂寞吟じ成す
幾句の詩。

送人從軍之蝦夷
意氣看る君が太荒を壓

山行

探勝行行不覺疲。山間石路自透迤。林
衣紅染霜過後。松蕈香來雨霽時。人倚
斷崖聽谷響。猿攀垂蕨透寒枝。偏喜幽
境秋更好。寂寞吟成幾句詩。

送人從軍之蝦夷

意氣看君壓太荒。豈辭行路險艱長。蝦

するを。豈辭せむや行
路險艱長きた。蝦夷風
起つて雲墨の如く。冰
海天晴れて日暫く黃な
い。玉帳時に分つ金鎖
甲。錦鞍春は擁す緑沈
の鎗。料り知る醜虜膽
先づ落るを。肯て臙腫
をして朔方を窺はしめ
んや。

其二

海島溟濛不毛に入る。
軍裝絡繹旌旄や。故園
日に遠くして南雲
絶ぬ。窮髮天は傾いて
北極高し。豫め識る威

夷風起雲如墨。冰海天晴日暫黃。玉帳
時分金鎖甲。錦鞍春擁綠沈鎗。料知醜
虜膽先落。肯使臙腫窺朔方。
海島溟濛入不毛。軍裝絡繹耀旌旄。故
園日遠南雲絶。窮髮天傾北極高。豫識
威稜動鞞鞞。兼將忠信濟波濤。從來王
化應無外。未必此行著戰袍。
其他佳句を拾ひ來れば、隨分見るべきも

稜の鞅靴を動かすを。
兼て忠信をもつて波濤
を濟る。從來王化は應
さに外無かるべし。い
まだ必らずしも此行戰
袍を著けず。

修養詩話

のがある。五言中にては古驛煙將白。秋
城樹漸蒼。園小栽花密。簷高得月多。七
言中にては霜楓不改三冬色。老鶴長思萬
里心。丙夜殘燈影相吊。丁年彩筆好誰憐。
の如きは朗々可誦ものである。此二人を
以て東國詩人中の巨擘となすを見れば、俞
曲園氏の詩眼高邁にして尋常一様の清人
に非ざるを知るべし。予は『東瀛詩選』

を讀んで、第一には、岸田吟香氏が日本人の
詩集を、俞氏に送致したるの勞を謝し、第二
には、俞氏選定の勞を謝し、第三には、友人曉
烏氏の、此書を贈與せられたる厚意を謝す。
惜いかな、清國に於て、火災のために、此原版
を焼失したりとぞ。

四八 東涯先生の詩

東涯先生の大家たることは、予夙に之を

東涯先生の詩

知れり。其詩に至ては、實に『東瀛詩選』に由て始めて之を知るを得たり。先生終生仕途に入らず、唯實務を務む。故に其詩に於ても、實に先生の面目を察知するに難からず。其詩の如何に質朴にして、しかも風趣に富めるかを見よ。

夏初遊高雄山寺

夏木葱龍山氣佳。上方只任白雲埋。僧

讀方

夏木葱龍山氣佳なり。

上方只任す白雲の埋むるに。僧居隨處多く若を栽へ。女伴尋常唯だ柴を賣る。藍水蛇行峭壁を廻り。古藤龍掛層崖を壓す。經遊幸に卜す好風日。百歳の人間壯懷を舒ぶる。

居隨處多栽茗。女伴尋常唯賣柴。藍水蛇行廻峭壁。古藤龍掛壓層崖。經遊幸卜好風日。百歳人間舒壯懷。

若し繪畫の上に於て、寫實を貴ぶとすれば、此先生の作の如きは、實に詩中の寫實畫なり。楓林雜選の時を避け、初夏を以て高雄に遊ぶこと既に奇なり。況んや其詩の實景を寫して、毫も凡俗の氣なきに至ては、

實に先生の高風を仰ぎ見るべし。斯人に
して斯詩あり。斯景にして斯詩を得たり。
山水も亦値遇の感ある可し。

四九 雲華上人の詩

雲華上人の詩は、其人物と興に頗ぶる品
格が高い。大抵緇流の詩は、一種の香煙花
氣を帯び、却て風流と相妨ぐる嫌がある。
然るに上人の詩に至ては、更に此臭味を見

ない。是れ其胸中雲煙の發する所とは云
へ、また賞時山陽竹田の諸豪と詩酒徵逐し
たるの致す所に非ざるか。余嘗て攝州に
遊び、摩耶山麓の一寺を訪ふ。當時山上雨
氣を帯び、雲煙横逸の趣、實に天地の偉觀を
極む。南朝の當時を憶うて、感慨轉禁する
能はず。沈吟少時、竊かに一詩を覓めんと
欲す。偶々壁上を見るに、雲華上人の詩あ

讀方

淡山阿嶺宿雲屯す
簇立の危礁雪浪
へる。海を劃する
の一帆人膽を破る
曉天の風雨鳴門を
渡る。

修養話詩

り。曰く淡山阿嶺宿雲屯。簇立危礁雪浪
翻。劃海一帆人破膽。曉天風雨度鳴門。
また其末に附記して曰く己丑八月十日、曉
度鳴門作、録似同舟燈寮司。この燈寮司と
は何人の事なるや、余いまだ之を知るに及
ばず。碩果上人に質せば、一朝にして明か
なるべし。此詩の上乗なるは申すまでも
ないが、其墨痕淋漓、運筆雄渾の勢は、直ちに

鳴門の莽濤に駕するの氣がある。あまり
に痛快の詩を見て、余自身の詩思は、何處へ
か消散して仕まつた。

五〇 閑忙の際唯一髮

五岳上人の詩が、風韻に富める事は、屢次
前にも話す通りである。今年の夏晚、京都
の城南に住へる一隱士を尋ねて、數刻の詩
話に耽つたが、其隱士の手にせる扇面に、五

閑忙の際唯一髮

讀方
 塵海滔々波閑なり難し
 吾儕の上策山を出でず
 白雲紅樹秋色遠く。
 聲の呦鹿林日晩る。
 人あり獨り對す西江の

岳上人の七古があるので、一寸借覽して微吟して見たが、仲々面白い。特に此頃のやうに、秋色四山に満ち、山林の樹色も、黄紅相開はるの時に當つて、微吟數過すれば、少時は人間の天地を離れて、青山紅葉中の人となるの感がある。其詩に曰く、
 塵海滔々波難閑。吾儕上策不出山。白雲紅樹秋色遠。數聲呦鹿林日晩。有人

水。坐して待つ初月の青嶺に上るを。興到つて偶ま拂ふ鷺縑の霜。我が畫何ぞ擬せん郭河陽。安んぞ筆力の坡公の如きを得て。亦此畫をして輝光を生ぜしめむ。噫嗚乎天地何の處か閑日無からむ。閑忙の際唯一髮。門外項洞風塵を吹く。詩を題して誰か弄せん此水石。

獨對西江水。坐待初月上青嶺。興到偶拂鷺縑霜。我畫何擬郭河陽。安得筆力如坡公。亦使此畫生輝光。噫嗚乎天地何處無閑日。閑忙之際唯一髮。門外項洞風吹塵。題詩誰弄此水石。
 其終りに、用坡公題郭熙畫詩韻とあるから、郭河陽の山水の畫に、東坡先生が詩を題したる韻を用ひ、此七古を作つたものと見ゆ

閑忙の際唯一髮

る。郭河陽の畫は、東坡の詩を得て、知己に
 遇うたるの感あるが、上人の畫趣の存する
 處は、能く之を解する者幾人かあるの意が
 ほの見わて居る。人間は、人各々能不能が
 ある。我が能力のある處を認めずして、却
 て能力已外の事を爲し、一時の榮達を求め
 んとすれば、忙中の人と化し了るは必然の
 勢である。政事に勤むるも宜い、教育に勤

むるも宜い、詩酒に投ずるもよい、田園生活
 もよい、要は唯々自己の性の適する所、能力
 の許す所に向ふ事が大切である。此詩中
 の妙處は、噫、嗟乎、天地何處無閑日、閑忙之際
 唯一髮の二句に在る。同じ一の仕事を爲
 し乍ら、或は閑人と爲り、或は忙人となる。
 何に由るか、曰く、爾の精神の置き場に由る。
 我等に取て必要なる者は、如來已に與へて

下[○]さ[○]れ[○]て[○]あ[○]る[○]。是[○]れ[○]を[○]之[○]れ[○]省[○]せ[○]ず[○]し[○]て[○]自[○]
己[○]能[○]力[○]以[○]外[○]の[○]物[○]を[○]求[○]め[○]ん[○]ど[○]す[○]。忙[○]人[○]と[○]爲[○]ら[○]
ざ[○]ら[○]む[○]と[○]欲[○]す[○]れ[○]ど[○]も[○]得[○]べ[○]け[○]ん[○]や[○]で[○]あ[○]る[○]。
五[○]岳[○]上[○]人[○]は[○]自[○]か[○]ら[○]自[○]己[○]を[○]評[○]し[○]て[○]吾[○]儕[○]上[○]策[○]
不[○]出[○]山[○]と[○]決[○]着[○]し[○]た[○]が[○]是[○]は[○]岳[○]師[○]自[○]身[○]の[○]決[○]着[○]
で[○]あ[○]る[○]。必[○]ら[○]ず[○]此[○]通[○]り[○]で[○]な[○]く[○]て[○]も[○]よ[○]い[○]山[○]
を[○]出[○]て[○]も[○]陋[○]巷[○]に[○]住[○]ん[○]で[○]も[○]そ[○]れ[○]は[○]自[○]分[○]の[○]好[○]
む[○]所[○]で[○]あ[○]る[○]。橋[○]の[○]上[○]で[○]も[○]市[○]街[○]の[○]中[○]で[○]も[○]閑

讀方

亂山堆裏柴門を掩
ふ。屋を繞るの松
泉聽て喧しからず
誰か老僧の高臥を
して穩かならしむ
白雲一片亦天恩。

日月は何處にもある。要は唯々此閑を見
出すか見出さぬかである、そこは各人の修
養に待たねばならぬ。

五一 岳上人の自得

亂山堆裏掩柴門。繞屋松泉聽不喧。誰
使老僧高臥穩。白雲一片亦天恩。此詩は、
岳上人晩年の作で、上人に取ては餘程の得
意の作らしい。余は初めは此詩を讀んで、

岳上人の自得

別に奇趣も見出さず、唯風流一遍の詩ぢやと思ふて居た。然るに近來は、此詩に對する意向が一變して來て、甚だ面白く、且つ有難い詩ぢやと思ふやうになつた。五岳上人も、詩畫を樂むの餘り、別に信仰談はせなかつたが、晩年に至るに従ひ、他力の佛慈を仰ぎ、念佛せられたるは何人も知る所である。然らば自己の生活の上に、他力の惠み

を感じ玉ひしは、是れまた明かな事である。然るに「疊をたゞいても南無阿彌陀佛一杯の水をのむも、如來上人の御用なり」と云はずに、誰使老僧高臥穩、白雲一片亦天恩と出た所に、岳上人の面目が顯はれて居る。これでなくてはいかん、唯人の口まねをして難有いと言て居るのは、眞個に難有いかどうであるか不分明である。内心に眞に

難有いと感ずる所があらば、人の個性を帯びて顯現して來る。これでこそ其人の活きた感謝であれ。嘗て『精神界』の中に、或老人の實話を紹介して有つたが、七十に餘る老人が、毎日田地を耕しながら、他力の救濟を喜んで、蓮如上人の御文に、「命のあらむかぎりには、念佛すべきものなり」とある處を、自分は、「命のあらむかぎりには、たらく

べきものなり」と仰せられた事ぢやと心得て、念佛し乍ら労働を息まぬと云はれたさうであるが、よほど面白い。實力ある者は、必らず其個性を帯びた一機軸を出だす。親鸞聖人の御一生涯の信仰生活は、必らずしも法然上人のそれと符合しては居らぬ。唯中心の御信心のみが同一である。従つて其信心が靈活の光りを放つて御座る。そ

れ故に、親鸞聖人の信心には自から聖人の個性を帯びて御座る。其個性を帯びて、法然上人と異なる所が、やがて中心の信心の同一なる所以である。何が同一であるか、信仰の活きて居る處が同一である。世人動もすれば、凡ての信心を鑄型に入れ、凡て同一形式によらしめんとす。是に於てか、形式愈々同じくして、中心愈々枯渇せんと

讀方

山猶ほ故のごさく
險に水猶ほ奔る。
復た前年涙を濺ぐ
の痕なし。自から
是れ人心境に随つ
て別る。櫓聲帆色
盡く君恩。

す、詢に熟慮すべき事である。

五二 観る者凡て恩寵

山猶故險水猶奔。無復前年濺涙痕。自
是人心隨境別。櫓聲帆色盡君恩。これは
作者晁補之が、朝廷の譴を蒙つて、一たび流
罪に處せられたのが、恩赦に遇ふて都に歸
る時に、胸中の歡びを詩に作つたものであ
る。罪もないのに御譴めを受けて、海外萬

観る者凡て恩寵

里の空に往くと思へば、山の險阻を見るにつけ、水の奔激を見るにつけ、人情の險阻が思ひやられて、抑へんと欲すれども涙が流れる。然るに今日恩赦を蒙むつて都の空に發足して見れば、山も水も昔日の通りであるが、我が心の中に、君恩感謝の意が満ちて居るから、櫓聲も帆色も凡て君恩ならざるはないと、歡喜の意を寫したものである。

辨圓が、他日板敷山を通過して、「山も山、みちも昔にかはらねど、かはりはてたる我心かな」と讀まれたと同じ意味である。信仰生活に入らぬ前は、人生の險阻多きに驚く、人情の翻覆多きに愕く、従つて世をも怨み人をも怨む。然かし信仰生活に入て見れば、凡て景色が違つて來る。家が富んだのでもない、他人が親切になつたのでもない。

い、自分の心が以前と異なつて來たのである。以前は親族や他人や、親や夫に向つて、親切を求めて居た。今如來の御慈悲を信じて見れば、我も人も凡夫であつて、御互に親切を持つて居らぬ事が分つて來た。唯一の親切者同情者は、唯彌陀一佛である。唯此我心の底の、黒い處も汚れた處も、凡て御承知の上で、我れ爾の慰安者とならんとすの

佛心が分つて見れば、自己は大赦を蒙むつた身分である。櫓聲帆色盡君恩といふ風情で、見る者聞く者歡びの縁となつて呉れる。自分は詩を作ることが出來なくても、いつの間にやら晁補之の詩中の人となつて居る。此等の詩は詩として別に上乘の作ではないが、作者の心の奥ゆかしい姿が見えて、何となく引きつけられて、一寸間で

もあると、直ぐ吟誦して見たくなる。此邊から顧みると、やはり上乘の作と云ふても宜いかも知れぬ。

五三 乃木將軍の殉死

昨年の山茶花樓詩話の中に、山口の人、作間鴻東氏が、旅順攻圍中の、乃木將軍に呈した詩を紹介して置いた。然るに今回將軍が殉死を致す前日、富士山の圖に題したる

七絶を書して、これを作間氏に贈つた。是が將軍の絶筆となつた處を見ると、將軍も心中竊かに鴻東氏に對して、天下知己に遇ふの感を有して居たに違ひはない。周郎赤壁の偉勳は、東坡赤壁賦と相並び、谷少將熊本籠城の偉功は、岳上人の七古と相並ぶとすれば、乃木將軍旅順攻陷の偉績は、鴻東氏の七古と相並んで、永く帝國に光りを放

つであらう。先般清國上海にて出版せられたる詩話の中に、早くも鴻東氏の詩を載せて、是に由て日本人民の愛國心の程が察せられると評したさうである。かの詩中に於て三典と三楠と相配した所は、實に妙を極めて居る。然るに今回將軍の殉死に由て國人期せずして一同に將軍を以て楠公に比して居る。死したる後に楠公に比

讀方

報に接する將軍色動かす。將軍痛まず聞く者痛む。棺を守るの夫人は感如何。夫人慟ぜず國民慟す。君見すや嗚呼忠臣三楠公。殉難報國闔門空し。壯烈古今相比するに堪へたり。三典身を獻じて遼東を取る。

するは、必らずしも難きに非ず。存命中に之を楠公に比したるは、鴻東氏の卓見と云はねばならぬ。かの七古を誦して、接報將軍色不動。將軍不痛聞者痛。守棺夫人感如何。夫人不慟國民慟。君不見嗚呼忠臣三楠公。殉難報國闔門空。壯烈古今堪相比。三典獻身取遼東。の結末に到れば、俯仰低回、去らんと欲して去る能はず、泣を蔽

乃木將軍の殉死

はんとすれども終に號哭の起るを奈何せん。今回の壯烈なる夫人の最後を見れば、萬一乃木將軍が切腹の仕そこないでもすれば、夫人は後から介錯をする程の氣象で、瞬きもせず之を見守り、將軍の潔き最後を見て、自分も心靜かに夫の後を追ふたと思はれる。此氣象であれば、鴻東氏の詩中の、
 夫人不慟國民慟の句は、決して夫人に對し

讀方

爾靈山の險豈攀ぢ
 難からんや。男兒
 の功名克艱を期す
 鐵血山を覆ふて山
 形改まる。萬人齊
 しく仰ぐ爾靈山。

ては溢美ではない、よく夫人の精神を顯はして居る。先日、乃木將軍の追悼會の席上で、「旅順の懷古」と云ふ題にて、一曲の薩摩琵琶があつた。此譜中に、將軍の爾靈山の詩をあみこんである。其詩は已に世人の知る如く、爾靈山嶮豈難攀。男兒功名期克艱。鐵血覆山山形改。萬人齊仰爾靈山。といふ詩で、曲調吟聲共に頗ぶる壯快、予は

乃木將軍の殉死

餘程面白く傾聽した。然かし此詩を吟ずるに當つて、第三句を、鐵血山を覆へして山形改まると讀んだやうである。然かしあそこは、鐵血山を覆ふて山形改まると讀んだ方が、作者の本意ではあるまいかと思ふた。これはあながち彈奏者の過失とは云はれぬ、已に世上の出版物に山を覆がへしと讀ませてあるから、これも一言予の意

見を録して、江湖識者の教へを仰いで置く。

五四 信仰は自己を視る

余は今年八月、友人曉烏氏を訪ふて北國に赴いた。途上敦賀を過ぎた。敦賀には恩師唐川梨溪先生が高臥して御座る。一寸御尋ねをしたいと思ふたが、瀛車の都合で、終に尋ねることを得なかつた。然かし先生の事を思ひ乍ら車中に座して居ると、

信仰は自己を視る

讀方

蒼黃族を擧つて京師を出づる。二十餘年彼れも一時。識らず驕奢は覆敗を招くを。老尼徒だ罪す傘工の兒。

忽ち先生の詠史の舊作を思ひ出した。詩は平家の没落を詠じたものである。其詩に曰く、蒼黃族出京師。二十餘年彼一時。不識驕奢招覆敗。老尼徒罪傘工兒。是は詩として面白いは勿論であるが、自分一身の修養の上に、少からぬ裨益がある。壇浦に於て平家の一門が亡ぶる時に、二位尼が云ふには、宗盛は眞實の自分の兒ではない、

實は傘屋の兒である。我腹に女兒が生れた時、女兒と告げなば清盛公の怒り玉はんことを恐れて、同日に生れた傘屋の兒と取代へたのである。されば小松内大臣ほどの智勇無く、今日の滅亡を致したのは、實にあの傘屋の兒のためぢやと云はれた。然かし平家の滅亡は、決して罪を宗盛一人に負せることは出来ぬ。二十餘年の間、平家

信仰は自己を視る

の一門が榮耀榮華を極め、亂暴狼藉を行ひ、天の咎めを蒙り、人の怒りを受け、天地齊しく棄てた結果が、即ち壇浦の滅亡である。然るに二位尼が、宗盛一人を責めて、平相國を始め自分等の一門の罪をば、更に顧みなかつたのは、大なる誤まりではあるまいか。是が此詩の大意である。然かし此二位尼のやうな勝手な議論は、随分吾々もやつて

居る。何か不都合な出来事があれば、第一番に他人を責めて、自分の足許を顧みない。かやうな生活をして居る間は、宗教の天地に入ることは出来ぬ。宗教の天地は、他人の足許を見ずに自分の足許を見るのである。人の胸中の善惡を見るのでなくて、自分の胸中の善惡を見るのである。法然上人が、十惡の法然坊、愚痴の法然坊と氣付か

せられたは、實に上人が他力信仰に入らせられた初まりである。我が心の狂亂怒濤に氣がついて見れば、凡夫の心の中を預め察し玉ひて、煩惱具足の凡夫と仰せられし佛語は、どうしても疑ふことが出来ぬ。従つて此煩惱具足の凡夫を、たすけんと誓ひ玉へる佛の本願を聞けば、此御慈悲の前に俯伏せずには居られぬ。此御慈悲に氣付

いて見れば、罪の重いも障りの重いも、更に歎く必要がない。却て此煩惱の重荷が、如来の御慈悲を一身に蒙むる因縁であつたと思へば、昔日の苦悶は、今や歡喜の泉と變じて来る。自是人心隨境別、櫓聲帆色盡君恩といふ光景になつて仕まふ。是れ信仰生活の人生に尊き所以である。吾人が家庭の中に在て、種々の苦惱をすることがあ

る。何故に苦悶をするのか、其實相を調べて見れば、大抵は心の中で、他人を咎めて居る。故に他人を責めると云ふことは、他人に害あるのみならず、自分も苦しまねばならぬ。古人は、君子は天を怨みず、人を尤めずと申しましたが、信仰の修養も、此點まで進みたいものである。此心を得て今の詩を讀み直して見ると、不識、驕奢、招覆、敗老、尼

徒罪傘工兒の轉結は、非常なる妙味があります。

五五 詩に煙霞を帶ぶ

東坡嘗て詩を論じて曰く、僧家の詩は、蔬筍の氣なきを要す、されど僧家本分の家風も亦無かる可らず。閩中の僧可士、その友僧を送るの詩に曰く、笠重吳天雪、鞋香楚地花。これ亦肉食者流の能く道ふ所に非ず

と。篤論と云ふ可し。武士は武士の精神を失ふ可らず、されど武士臭きは人の厭ふ所なり。既に曩に論じたるが如く、僧家の詩には、大抵香烟花氣を含みて、風韻を失却す。風韻なき者は、是れ既に詩に非ず。宋僧惠通、最も詩を能くし、幽清閑雅、更に蔬筍の氣なし。東坡嘗て惠公に詩を寄せて曰く、語帶烟霞從古少。氣含蔬筍到公無。惠

公は知己を得たりと云ふべし。蔬筍とは精進料理の事にして、僧家の臭味を指すものなり。我國に於ては、詩僧少からず、雖も、蔬筍の氣を含まざる者に至ては甚だ少なり。ひとり六如上人の詩は、幽清溫麗、語々烟霞の氣を帶ぶ。若し東坡をして之を讀ましめば、必らずや擊節三賞せむ。余、上人の詩に於て、左の數絶を愛誦す。

讀方

春日早起
春禽啼破夢魂殘。欲看簷花怯曉寒。知是夜來微雨過。脆紅無數濕欄干。

花下步月

濃香凝處影參差。深院微吟步月時。訝隔花家犬吠。朦朧難認我爲誰。

暮春夜坐

春夜芳醪手自傾。無人來共此時情。

修養詩話

春日早起

春禽啼破夢魂殘。欲看簷花怯曉寒。知是夜來微雨過。脆紅無數濕欄干。

花下步月

濃香凝處影參差。深院微吟步月時。訝隔花家犬吠。朦朧難認我爲誰。

暮春夜坐

春夜芳醪手自傾。無人來共此時情。

人の來て此時の情を共にする無し。朦朧たる微月西廂の下。閑に聽く山茶花落るの聲。春日雜興
半窓の斜日紗に透つて明かに。風は餘寒を帯んで陳々輕し。啼き罷むの幽禽花を蹴て起つ満階の紅雪落て聲無し。從山階歸途上
青萍白石水磷々。寂寞たる幽花暮春を管す。黃鳥自から啼てまた自から聽く。溪山十里人に逢はず。

朦朧微月西廂下。閑聽山茶花落聲。

春日雜興

半窓斜日透紗明。風帶餘寒陳々輕。啼罷幽禽蹴花起。滿階紅雪落無聲。

從山階歸途上

青萍白石水磷磷。寂寞幽花管暮春。黃鳥自啼還自聽。溪山十里不逢人。

五六 花倒さまに生ず

花倒さまに生ず

清澤先生嘗て其『日乗』に書して曰く、
 「余今夕死想觀に打たれ、殆んど脱する能
 はざらむとす。冥想數時、僅かに心胸の開
 悟を見るを得たり」と。蓋し先生一たび
 肺を病みてより、死想觀に打たれ、厭世の念
 を起すこと幾度ぞや。されど胸中の信念
 は、此に其光輝を發し來て、妄念の密雲いか
 に重疊すと雖も、忽ちこれを驅除し去て、ま

讀方

石壓して笋斜めに
 出で。崖懸つて花
 倒さまに生ず。

た平和の生活に歸らしむ。「我れ如來を忘
 るれば、世に處するの道閉ぢ、我れ如來を念
 すれば、世に處するの道開く」とは、眞に是
 れ先生實驗の告白なり。『衡州蔣道士の詩
 に曰く、石壓笋斜出、崖懸花倒生と。竹根已
 に地中に存する已上は、巨石これを壓すと
 雖も、筍はいかにして出で來るべし。花木
 已に生氣を有する已上は、崖崩れ石傾くと

花倒さまに生ず

雖も、花は結局開かざる可らず。信念已に中に存する上は、妄念いかに蝟集すとも、歡喜の筈は斜めにも出で、感謝の花は倒まにも生ずべし。蔣道士の詩、元是れ景を詠するもの也と雖も、安んぞ胸中經驗の露出に非ざるを知らんや。

五七 詩仙堂を訪ふ

大正元年十一月七日、佐々木隈部二兄と

共に、岡崎別院に詣し、鹿谷の草庵を敲き、遂に一乗寺村詩仙堂に至る。堂は三河の人石川丈山の築く所なり。丈山初めの名は、重行、徳川家康に仕へて最も信任せらる。大阪夏陣の時、一生の思ひ出に、充分の功名せんものと、遂に軍規を破り、拔驅の功名を計り、先陣の諸將を抜て直ちに城門に薄り、敵の首級二箇を得たり。直ちに軍門に馳

參じ、實驗に具へけるに、徳川公、勇氣の程は
 感賞し玉ひけれど、軍律を犯したるの罪は
 宥し難し、ことに寵臣の事なれば、諸將の手
 前、公私混同す可らずとて、終に勘當なし給
 ふ。重行、これより去て比叡の麓、一乘寺村
 に屋を結び、山水花月に情を慰む。我朝の
 三十六歌仙に倣ひ、唐宋の諸名家、三十六人
 の詩を選び、其畫像の上に題し、これを楣閒

に掲ぐ。畫は狩野探幽の筆に成り、詩は丈
 山自から之を書す。これに由て終に詩仙
 堂の名あり。丈山年九十にして終る。晚
 年に至て詩尤も多し、其五言の佳なる者、暴
 雨。水。皆。立。低。雲。山。若。浮。枯。苔。得。雨。綠。老。葉。先
 秋。黃。心。深。山。轉。淺。身。瘦。道。仍。映。の如き、以て
 胸中の蘊蓄を見る可し。今其五七言數首
 を記す。

讀方

閑適
靜かに風物を觀て年の遷るに感ず。終日澹然榻に漚て眠る。庭院人無く春晝永し。遊禽來往す落花の邊。

重陽雨

籬邊の濕帽山間の雨。秋色使人思孟嘉を思はしむ。貧は淵明に似て詩は未だ似ず。羞づ白髪を以て黄花に對す。庭前線櫻
一樹千絲二丈長し。繁英下に向つて幽香を發す。此花若し唐園の裏

閑適

靜觀風物感年遷。終日澹然憑榻眠。庭院無人春晝永。遊禽來往落花邊。

重陽雨

籬邊濕帽山間雨。秋色使人思孟嘉。貧似淵明詩未似。羞將白髮對黃華。

庭前線櫻

一樹千絲二丈長。繁英向下發幽香。此

に在らば。楊妃をして海棠に比せしめず。

幽居即事

山氣人世に殊なり。常に含む太古の情。四時雲樹の色。一曲淵泉の聲。雨濕ふて鶯衣重く風喧かにして蝶袖輕し。詩を爲つて老に至ると雖も。いまだ鬼神をして驚かしめず。

溪行

高巖淺水の邊。廻眺吟鞭を弄す。野徑管茅の露。田村篔竹の煙。溪は空ふして鶯韻緩く。山は盡きて山蹄前む。山性雲と出づる。また應

花若在唐園裏。不使楊妃比海棠。

幽居即事

山氣殊人世。常含太古情。四時雲樹色。一曲淵泉聲。雨濕鶯衣重。風喧蝶袖輕。爲詩雖至老。未使鬼神驚。

溪行

高巖淺水邊。廻眺弄吟鞭。野徑管茅露。田村篔竹煙。溪空鶯韻緩。山盡馬蹄前。

さし。雨に先だつて還るべし。

修養詩話

懶性與雲出。又應先雨還。

丈山一たび山水に隠るゝの後、唯風月を友とし、また夢にだも顯達を慕はず。後水尾天皇、その風流の程を聞召し、一日の清談に風情を慰せむがため、使者を以て宮中に招き給ふ。丈山一首の歌を奉りて、堅く其招きを辭す。歌に曰く、「波らじな蟬の小川のあさくとも、老の波そふ影も恥かし。」

感斜めならず、終に其意にまかせ玉ふ。然るに其後本願寺枳穀邸に於て、茶會を催ふし、丈山にも案内しければ、丈山心勇み立ち、いかにもして茶席に列せんと思へども、一たび朝廷に誓ひ、鴨川を渡らじと申したる上は、これを渡るは恐れありとて、終に一乗寺村を發し、丹波の國境に赴き、鴨川の源流盡きたる處を廻りて、遙に枳穀邸に赴かれ

詩仙堂を訪ふ

たり、其風流の情察すべし。然るに世人動もすれば、石川丈山を以て、徳川氏の京都に對する隱し目付なりなど云ふは、實に齊東野人の語にして、丈山の人と爲りを知らざる者と言ふべし。近世の詩人その徳を思ふて、丈山を詠する者甚多し。予特に淡窓先生の詩を愛誦す。蓋し石丈の爲人を寫出して、また餘蘊なければ也。

石川丈山

雙提す血鬪腰。石丈は信に人豪。却て功名の手を以て。新詩細かに刻雕す。一臥四明の麓。固く萬乗の招きを辭す。平安咫尺と雖も。渡らず覺水橋。時に歩す北郊の路。朗吟漁樵を驚かす。奚囊佳句を盛る。掛けて偃月刀に在り。

石川丈山

淡窓先生

雙○提○血○鬪○腰○。石○丈○信○人○豪○。却○以○功○名○手○。新○詩○細○刻○雕○。一○臥○四○明○麓○。固○辭○萬○乘○招○。平○安○雖○咫○尺○。不○渡○覺○水○橋○。時○步○北○郊○路○。朗○吟○驚○漁○樵○。奚○囊○盛○佳○句○。掛○在○偃○月○刀○。長○三○洲○。また嘗て丈山を詠じ、其結句に、古人の成句を安じて曰て、英雄回首即神仙と、眞に能く丈山を寫せるものと云ふ可し。熊

詩仙堂を訪ふ

谷蓮生坊佐々木高綱の如き皆丈山と相並びて、英雄首を回せば即ち神仙の流亞なり。トルストイ氏曰く、信仰は心の方向轉換なりと。吾人の常に苦惱する所以は、あまりに人に待つこと多くして、自己の何者たるかを顧みざるに在り。我が昔日の行程を知らば、今日の生活は既に是れ分に過ぎたるもの也。余由て今の詩句を變じて、更に

一偈を爲さんとす。曰く、煩悶回首即安心。

* * * * *

詩仙堂

荻洲散人

雲臺不用畫功名。此處青山堪託生。幽夢時窺
 三昧境。微吟或築五言城。書分草隸各究妙。
 友選漢唐殊有情。嘉邇欽君拋富貴。風煙終古
 建旗旌。

* * * * *

五八 叡麓の洞窟

詩仙堂の秋まさに酣にして、庭前の楓樹爛然霜に飽く。溪水の庭上に引ける者、また珮環の音を弄す。掃痕新たなる處、山茶花輕紅を翻へし、眞に人をして仙境に至るの感あらしむ。椽端に坐して、腰に携へたる辨當を開き、閑談笑話の中に晝食を終る。されど我等の目的は、詩仙堂を訪ふに在らずして、實に叡麓の洞窟を敲くに在り。洞

窟とは何ぞや、狸谷の不動尊これ也。これは是れ嘗て清澤先生が、木食道人を尋ねたる處也。澤柳稻葉の二先生も亦この洞門を敲けりとぞ。詩仙を辭するの後、直ちに東に向ひ、山麓の溪路を進む。秋光碧を凝らし、晴煙衣袂に粘す。行くこと凡そ八丁にして、瀑布の音微かに聞ゆ。佐々木兄曰く、世に不動の瀑と申すことあれば、その瀑

(432)

聲をたよりて進まんには、必らず洞窟に至るべしと。由て巖角を攀ぢ、瀑布の下に達す。されど更に洞門なく、また不動尊も存せざりき。乃ち元の溪路に下り、左方の徑路を攀づるに、二丁あまりにして巖窟の前に出でたり。洞門の前には格子戸を立てられたり。これを開きて窺ふに、正面の巖に不動尊を刻出せり、眼光炯然として人を

(235)

射る。洞中の右方には更に一洞を穿ち、藁を施き、青竹を編みて身を倚するの位置を爲す。當時會々何人も住せざりしと雖も、時々洞中に參籠する人のあるは、これを以て證明せられたり。明治二十二年の頃、この洞に住したる隠士は、松脂を嘗め、蕎麥粉を食し、また時々は山を下りて、一乗寺村に出で、民家の残飯など乞ひ得たりと云へば、

純粹の木食生活には非ざりし也。清澤先生のこれを尋ねしは、全く彼の隱士に就て生活の法を質し、以て自己の修養の資と爲し玉はんと試みたるもの也。先生他日浩浩洞に於て、「基督もソクラテスも、偉人には相違なきも、その悟道の極點を云へば、パンに屈托せぬと云ふに過ぎぬ、されば人間は、この問題の解決を爲し得たるものは、天

下これより強きはなし」と申されしが、實に先生の實驗工夫の上より、古聖賢を評したる者なるべし。

案ずるに此洞窟は、餘程早くより存せしものと見え、石川丈山の詩稿にも、この洞窟のこゝを詠じたるものあり。白隱禪師の傳によるに、禪師初め修業に心を凝らすと雖も、尙ほ未だ至らざる所あり。或人教へ

て曰く、然らば叡山の麓、白川の山中の道士を訪ふべし。此人は白・幽・子と名け、壽は二百歳にも過ぎたらむ。一見愚なるが如し。と雖も、山深く住みて人を見るを好まず、里人稱して仙人と呼ぶ。もと石川丈山の師にして、天文に精しく亦醫道に通ず。若し禮を盡して問ふ者あらば、希れに言を出すことありと。禪師此に於て、寶永七年正月、

美濃の國を立ち出で彼處に赴く。山深く分入り、樵夫に道を尋ね、雲を分け巖角を傳ひ、纒にして洞口に達す。洞の入口には、蘆の簾を垂れたり。透間より窺へば、白・幽・子閉目端坐す。蒼髮垂れて膝に至り、朱顔童に似たり。机上には、中庸、老子、金剛經を置くのみにして、食器衣衾等さらに見る所なし。禪師膝行、來由を告げて教へを垂れん

ことを乞ふ。初めは辭して、何事も知らずと云ひしが、其請の切なるに由て、終に禪師の手を取り、親しく養生の秘法を授けしに、禪師これより、心身共に健を加へ、心眼また開發する所ありたりと。然るに或人これを評して、白幽子は實際人に非ず、これ白隱禪師の假託なり。白幽子に因縁して、以て自己の法を神靈ならしめんとせしもの也

と。されど余思ふに、此批評もまた必らずしも正當ならず。其故は、丈山の詩集には、この洞門の隱者を尋ねしことを記し、相州金澤の僧桃溪の詩集中にも、また白幽子を尋ねたることを記されたり。尙ほ眞如堂の裏には、白幽子の墓碑存して、其表面に、松風窟白幽子之墓と書し、其側面に、白川山居隱士と記入せられたれば、此人必らずしも

無しと断す可らざるか。されど清澤先生の尋ねられし道士は、白幽と別人なること勿論なり。唯此洞窟だけは、白幽子の住みしものが、即ち今の狸谷の洞窟と同一なるは、殆んど疑ふべき餘地なきが如し。今左に其詩を録す。

題石不動壁

晚山幽靄の裏。一徑林丘に入る。僧去て松戸

晚山幽靄裏。一徑入林丘。僧去鎖松戸。

題石不動壁

石川丈山

を鎖す。寥々算水流る

訪白幽子

秋興吾を招いて、白水を沂る。嵐光踏み破て幽踪を訪ふ。山村籬外一枝の菊。石徑耳邊十里の松。澗戸厭はず游客の扣くを。巖扁只懶雲の封するあり。遠來爲めに山居の好きを問へば。冷露いまだ晞かず草蛩鳴く。

寥々算水流。

訪白幽子

僧 桃溪

秋興招吾沂白水。嵐光踏破訪幽踪。山村籬外一枝菊。石徑耳邊十里松。澗戸不厭游客扣。巖扁只有懶雲封。遠來爲問山居好。冷露未晞鳴草蛩。

狸谷洞窟記

狸谷洞窟者。在叡嶽西麓。距一乘寺村詩仙堂八丁許。中安不動尊。二十年前。木食道人住此中。修苦行云。清澤先生之所訪問者即是也。其後杳不知道士之所在。無復訪之者矣。今茲十一月十七日。予與佐々木鹿村。隈部蘇月相謀。往而訪之。滿山紅葉飽霜。晴煙漲溪。山雲觸衣。秋氣可人。溪谷漸狹。而途

將窮。左轉攀山腹。遂至于洞門。寂無人影。鬼氣逼人。心氣悚然。不可久留。因賦一絕記之。

山溪曲々路縈回。往到巖頭古洞開。

曾是先師求道跡。追懷今日賞秋來。

大正壬子十二月一日

一荻洲散人

五九 醒めたる人

明の時代の話であるが、華亭といふ處の一縣官が、徒然のあまりに、詩の話でも爲さんものと、其近邊で名高い一の郷先生を訪問した。先づ案内を請ふて、童子に導かれて書院に通つたが、一向に主人が出て來ない。二十分間ばかり待て居る中に、睡氣を催したから、暫らく机に憑て眠つて居た。其處に主人が出て來たが、折角客人が熟睡

して居るのを、揺り起すのも不本意であるとして、自分も机に憑て、暫くの間眠りを爲し、客の醒めるのを待て居た。其間に客人は眼が醒めたが、前を見ると主人が氣樂さうに眠つて居る。今これを起しては、主人の熟睡を妨げるからとて、主人の醒めるまで今暫く眠らんものと、また再び眠りに就いた。今度主人が醒めて見ると、客は依然と

して眠つて居る。随分長い眠りであるから、此方より揺り起さずとも、最早や醒むるに間はあるまい。さらば今暫くの間、予も亦眠りを取らんとて、前の如く机に俯し、主客頭をつき合せて眠つて居る。そこに客人が眼をさまして、大に驚いて思ふには、この主人は餘程の眠り好きと見ゆる、此分にては今日は詩の話も出来まじとて、主人を

起さず、其儘暇乞ひせず、去つた。暫くすると主人が眼を醒したが、更に客の影は見えない、唯夕陽が窓紙の半面に映じて居るのみであつたと云ふ事である。然るに宋の陸放翁の詩に、頗ぶる此事に類似した詩がある。固より放翁の詩と此事柄とは何等の関係はないのであるが、詩意と事柄とが相似て居るのが奇遇である。其詩は

讀方

蒲團に相對して睡味長し。主人と客と兩つながら相忘る。須臾に客去て主人覺むれば。一半の西窓夕陽無し。

次の如くである。

相對蒲團睡味長。主人與客兩相忘。須臾客去主人覺。一半西窓無夕陽。

予思ふに、此話は随分吞氣な話である。然かし此中にも吾人の忘る可らざる教訓がある。トルストイが宗教的自覺が起つて、人世の恃む可らざる事と、やがて出遇ふべき死の問題とに觀じ至つた時に、自分の

妻子を觀れば、彼等は人世の恃むべからざる事も知らず、唯眼前の月花を樂みし、夢幻の如き浮世の虚榮にあこがれて、鼯聲高く眠つて居る。若し足の下に死の運命のせまり來りつゝある事を知らせたら、彼等はさぞや驚いて、今までの快樂は消ね去るであらう。然かし乍ら、いかに之を隠したとて、來るべき運命は、到底來らざるを得ない。

死の問題を知らさずとも、彼等は結局死の運命に取りつかれねばならぬ。人世の無常轉變を知らさずとも、彼等は結極この問題に出會せねばならぬ。今日いかに無邪氣に暮らせばとて、やがては夢のさめ來りて、愛別離苦に泣き、疾病憎怨に哭せねばならぬ。然らば今日これを打明けて、彼等に此の道理を言ひ聞かせ、共に信仰の道を進

み、安慰の花を摘むこそ眞の親切ではないか。嗚呼、我はこれを隠すべきか告ぐべきか、自から顧みて歎息せざるを得ずと云ふて居る。然るに此有様を知て、遠慮なく父母妻子に知らせたのは、釋尊である。釋尊は、自分の醒め玉ひた時、決然袂を振ふて王宮を去り、此に宗教的安慰を求められた。棄てられた妻子の歎きは云ふまでもなく、

父王は深く驚かせられた。驚いたとて釋尊は更に構はない、王宮より屢次使者を出されて、何卒再び王宮に歸り、元の如くに机の上の差向ひになつて、虚榮の夢に落ちやうではないかと、幾度か勧められたれど、釋尊は依然これを退ぞけ、自己の醒めたる通りに、父王も妻子をも醒まして、共に佛道に入り、永劫安慰の行程に上られた。清澤先

修養詩話

生の御話に、「釋尊が妻子を棄てたは、一寸見れば不仁のやうであるが、棄て、突き放したのではなくて、共に睡りを醒まして、苦惱解脱の行程に上つたのであるから、其不仁なる所以は、即ち大に仁なる所以である」と申された。虚榮の夢の醒めざるがために、尙も虚榮を求め。然るに思ふ通りに求める事が出来ぬ、此處に苦惱は生ずるの

醒めたる人

である。今まで耽つて居た虚榮は、今やま
さに醒んどしかけた。虚榮の夢は醒んど
しても、迷ひの夢は仲々醒めやらぬ。結婚
已前は、結婚したなら、定めし楽しいことで
あらうと想像して居た。然るに事志と違
ひ、虚榮の夢は次第に傾いて行く、かくて人
世を恨み、他人を羨やみ、死ぬるまで夢が醒
めずに、この一生を終るとすれば、是れまた

憐むべきものではないか。醒むべき睡り
を醒さずに、人生の虚榮の影に苦しむより
も、醒むべき者を一度びさまして、此處に安
慰の生活に入るは、これこそ眞の幸福では
ないか。

法然上人の御在世に、信行兩座を分たれ
た事は、世人の等しく知る所である。其時、
聖・覺・法・印・信・空・上・人・の・二・人・が・先・づ・信・の・座・に

つかれた。其時三百八十餘人の御弟子は皆うろくして、信の座に着く可きか、行の座に着く可きか、更に決することが出来ず、互に顔を見合せて居た。この時遅れ馳せに参つた熊谷蓮生坊は、直ちに信の座に列して、何の思案も懸念もなかつた。三百八十餘人の御弟子と蓮生坊と比較するに、その學問と、法然上人に親炙したる年數と

は、寧ろ熊谷の方が劣つて居る。彼れは嘗て如來の大悲の難有さに感じて、一篇の頌文を作つたが、これを漢文に直すほどの學力がなくて、他の御弟子に頼んで、漢文に直して貰つたことである。然るに信の座に列したる時の態度は、實に明快迅速で、何等の思案もいらなかつた。是は何のためであるか、三百八十餘人の弟子は、眠り乍ら法

然上人の御化導を聽て居た、ひとり熊谷直實は醒めて居た。初めて鎌倉殿に御暇を得て京都に来るや、聖覺法印の門を敲いて、念佛の法門を開んとした時、其門の式臺の石にて、頻りに懷劍を磨き立てた。何のために劍を磨するやと尋ねられし時、彼れは思ひ入りたる顔色にて、予が如き罪深き者は、なみくの事にては、よも助かるまじ。

若し切腹して助かる者ならば、師の一令の下に、腹をもかき切らんと覺悟せし者なりとぞ。法然上人は四十三歳にして醒め玉ひ、愚痴の法然坊と氣付かせられた。熊谷は磨き澄したる懷劍の前に醒めた。醒めたる心を以て、醒めたる人の教へを聞く。片言の下に信仰の光りに接し、悪人を救ふの大悲とは、即ち我がために御慈悲なりと

知られた。已に極重悪人と自覺した身は、
 いづれの行も及ばぬ事は覺悟の前である。
 今更信行兩座が分たれたりとて、何ぞ行の
 座に列するの權利あるべきや。たゞ大悲
 の誓約の深重なるを感謝するのみ。我が
 心を兼ねて知り玉ひて、極悪深重の衆生を
 救ふこの佛心の尊とさよ。我は唯この親
 心に憑るのみ、この大悲に活くるのみ。我

は此親心を知るより外に、何の行が勤まる
 べきや、唯信の座に列すべきのみと。是れ
 即ち蓮生法師の胸中である。法然上人が
 いかに深く醒め玉ひたりとて、聞く御弟子
 の醒めずして、百の法然上人ありとも、亦こ
 れを何如にすべきや。況んや説く人と聽
 く人と、二者共に睡るに於ては、夕陽已に西
 窓に傾き、人生の運命旦夕にせまると雖も、

醒めたる人

結極何等の得る所なくして、主客共に人生の別れを爲さざるを得ざる事である。

六〇 良工苦心の跡

廣瀬旭莊の詩才は、遙かに其令兄淡窓先生を凌いで居る。唯其胸中の養ふ所が生に及ばぬために、先生の如き温醇の詩が得られぬのである。若し之を批評すれば、淡窓は詩の名家にして、旭莊は詩の大家で

讀方

濕は及ぶ琴書の際。暖は回る衾枕の中。

ある。名家には名詩があるが、大家の如く多作縦横でない。大家は多作縦横ではあるが、名家の如き名詩がない。然かし是は淡窓と旭莊との比較上から云ふ事で、愈曲園が旭莊を評して、東國第一の詩人と云ふ程であるから、他の詩人に比して、名詩の多い事は云ふまでもない事である。旭莊の春夜聞雨の詩の一聯に、濕及琴書際。暖回

良工苦心の跡

衾枕中。と云ふのがある。然るに此聯句は、初めは及の字を入の字に作つて、濕入琴書際とあつたのを、後に至て改めて、濕及琴書際といたしたものである。或人これを旭莊に質して、何故に入を及に改むるの必要ありやと言ひしに、旭莊答へて、濕入とありては、梅雨の詩に似たり、故に濕及と改めたりと申されしとぞ。また五岳上人須磨

過須磨

郷思は殊に暮天に向つて多し。肱枕搖々海波に臥す。月は篷窓に入て人見せず。孤舟夢を載せて須磨を過ぐる

を過ぐるの詩に、郷思殊向暮天多。肱枕搖々臥海波。月入篷窓人見。孤舟載夢過須磨。と云ふのがある。是は『宜園百家詩鈔』の中にも出て居る。然るに後に至て、人不見の處を改めて、人不覺とせられた。故に晩年書いたものには、みな人不覺の方に書いてある。人見せずと、人覺めずとは、何程の優劣があるか、此處口舌を以て争ひ

難し、唯讀者の會得を待つより外はない。之に由て思ふに、五岳上人は詩に別才あり、旭莊は詩の天才であると云ふけれども、唯天才や奇才では妙詩は出來ぬ。其絶妙の詩の裏面には、他人の窺ひ知られぬ苦心がある。山陽が嘗て予を評して才子なるが故に學問を成し遂げたりと云ふは、我を知らざるもの也と云ひしとぞ。我も人も、自

己の職務に發憤せずしては、五十の人生果して何事を成し得べきや。

六一 詩人忠孝の意

歌を讀んでも、詩を作つても、忠孝友愛の情を離れ、唯花に酔ひ月に吟ずるのみにては、詩歌の本分を失して居る。古へ云ふ、詩は志なりと。されば人の志の發して藻詞となるもの、これ即ち詩歌の本分である。

先日さる友人に遇ひしに、友は云ふ、先日某處に歌會を開けり、題は山と定めらる。其中にて、さる人の讀み出でたる、「足びきの山としいへば桃山を思ふぞ民のまことなりける」の歌を以て、當日の秀逸と定められたりと。我れ是を聞きて、暗涙の胸間に生ずるを覺ぬ、まことに諒闇中の歌なり。また先日一知友を尋ねしに、其友云く、予れ

讀方

柳外の小樓樓外の花。
一灣の春色窓紗に上る
自から憐む身は雛鳥と
似たり。母に伴ふて時々
淺沙に浴す。

此間、八十歳の老母を伴ひて、別府の温泉に浴したり。我が年已に五十に近しと雖も、八十の母に伴はれては、いつまでも小兒の如き心地して、心樂しき遊びにてありき。其時一詩を得たり、君これを評せずやと。曰く、柳外小樓樓外花。一灣春色上窓紗。自憐身與雛鳥似。伴母時々浴淺沙。予云ふ誠に傑作なり、詩人忠孝の意に背かず。

若し心ある人此詩を讀みなば、母を温泉に伴ふの費用なくとも、せめては近き寺門を敲き、母と共に如來の御慈悲を聞くの心を生ずべし。況んや世上父母に負き、老い先き短き兩親を泣かしめつゝある者、此の如き詩を玩味せば、心中必らず慚愧の心を生じ、或はこれに由て、翻然孝子と成るの人無きに非ざるべし。詩に曰く、孝子さか賢さかしから

暗中時に滴たる親を思ふの涙。只恐る兒を思ふて涙更に多きを。

す。永く爾の類を錫たまふと。古人豈我を欺かんや。また倪瑞璿にずいせんといふ一婦人が、旅路に在て、故郷の母を思ふの詩に、暗中時滴思親涙。只恐思兒涙更多と讀まれてある。いみじくも云ひつるものかな。誠に兒が親を思ふの涙よりも、兒を思ふの涙は幾倍なるを知らず。我も人も煩惱に引き回され、如來の御恩を思ふ心の薄しとて歎くこ

と多し。されど思へ、我れ斯く思ふて、身の
 淺間しきを歎くの時、如來の慈母は我等を
 思ふの情更に切なり。爾煩惱に追はるゝ
 が故に、我に常照護念あり。爾世事に引か
 れて親を忘るゝが故に、彌陀の方に攝取不
 捨の誓約ありと。是れ實に如來慈母の御
 心なり。此心を思はずして、唯我機の淺間
 しきをのみ歎くは、誠に愚かなる事ならず

や。我が機の淺間しきを知らば、此機を本
 として憐み玉ふ如來慈母の涙の多きを思
 ふて、一層深く感謝の生活に還らざる可ら
 ず。是れ親鸞垂人の我等に教へ玉ふ處な
 り。「喜ぶべき事を喜ばぬにて、いよゝゝ往
 生は一定と思ひ玉ふべきなり。その故は、
 喜ぶべき心をおさへて喜ばせざるは煩惱
 の所爲也。しかるに佛かねて知ろしめし

て、煩惱具足の凡夫と仰せられたる事なれば、他力の悲願は、かくの如きの我等がためなりけりと知られて、いよくたのもしく覺ゆるなり」とは、即ち此意味の御教へに候はずや。一寸序でに詩の語を解して置くが、凡て詩の上では、憐の字の使ひ方が二様になつて居る。一は愍然の意で、人の不運不幸を憐むことに使ふ。一は喜ぶ意味で、

自分の仕合せや多幸の事を喜ぶ時に、憐むと云ふ字を使ふのである。例へば北條氏の亡びた事を弔して、可憐辛苦九生業。天王寺畔見妖星。と云ふやうな時は、勿論愍然の意である。北條氏が泰時、時頼等の苦辛を経て、九代まで天下を經營したのに、高時に至て豪奢を極めた爲めに、天王寺の上に妖星が現はれ、終に北條氏の滅亡に歸し

たから、高時の無謀無智を愍れむの意である。今の別府温泉の詩に自憐とあるのは、これは身の仕合を喜ぶの意である。凡て詩を読む時には、此二意を心得て居て、其時其詩に由て見分けて行かねばならぬ。別府の温泉は、他の温泉と異なつて、海岸の沙の中から湧き出るから、沙湯と稱して、四五寸の深さの處で、沙の中に寝るのである。

そこが、鴨の兒が親鳥と一處に、淺き水中でちやぶく、云はせると似て居るから、自憐身與雛鳥似。伴母時々浴淺沙と歌ふたものである。

六二 詩に由て文法を知る

英語を研究する時、一番困るのは、何々であらう、何々であらねばならぬと云ふやうな、助動詞の見分けを付ける事である。何

詩に由て文法を知る

返聞いても直ぐに忘れて、どうも意味が明瞭にならぬ。然るに漢文にても此困難はやはり免がれぬ。一度呑み込こんで仕舞へば間違は起らぬが、呑みこむのが困難である。先づ漢文では、助動詞に一番多く出るのが、應の字と當の字である。應の字は推量を顯はし、當の字は當然かくあるべき事を顯はす文字である。故に若し吾當往

讀方

四五日中應さに雨有るべし。三千里外更に雲無し。

とあれば、吾はどうしても往かねばならぬの意である。由て予は學生に話す際に、詩を以てすれば、一生忘れないであらうと思ふて、時々詩を示すことである。雲集上人の詩に、四○五○日○中○應○有○有○雨○。三○千○里○外○更○無○雲○。と云ふのがある。是は多分四五日中には雨が降るであらうなせなれば、一天晴れ渡つて三千里外さらに一點も雲もない

詩に由て文法を知る

讀方

知る是れ仙源は應さに
遠からざるべし。半潭
の春水桃花を漾はす。

からこの意にて、應有雨の應の字は推量の
意である。また誰かの詩に、知是仙源應不
遠。半潭春水漾桃花。と云ふのがある。
是は古へ仙人の住んだと云はれた桃源も、
此溪の上流に在て、あまり遠いことではあ
るまい、なせならば此やうな桃の花が、春水
の上にとゞやうて居るからこの意にて、應
不遠の應の字も、同じく推量の意である。

かやうに詩に由て記憶して置くと、混雜し
易い助動詞も、乃を迎へて解釋が出来るこ
とである。この雲集上人の詩は、漢土の諺
に基づいて出来たものと見えて、彼國の諺
に、「天に一點の雲なきは三日の雨」とい
ふ語がある。あまりよく晴れ渡りて、一點
の雲もなき時は三日の中に必ず雨が降る
と云ふ事である。それで四五日中應有雨。

三千里外更無雲。と讀んだものである。人間もあまりに萬事が整頓して、何もかも不足がないとなれば、其家には遠からず、災難が起ると覺悟せねばならぬ。これは天理の常であるから、何としても致方がない。そこで此災難を避ける道は、唯一つある。それは、充分に満たさぬと云ふことである。何事も控へ目にして、衣食を奢らず、遊興に

耽らず、身を抑損して行けば、満ちぬ者の缺ける筈がない。故に古人も、天道は満るを惡むと云てある。此理を心得て居れば、思ふにまかせぬ事もあまり不平と云ふ程の事はない。思ふにまかせぬから災難が來ないので、思ふにまかせたら、三日たゝぬ中に災難が來るものと思ふて居らねばならぬ。

詩に由て文法を知る

讀方

朝には雲水に遊び暮には兼葭。島嶼洲汀總て我が家。但だ此心をして寵辱なからしめば。何ぞ妨げん一たび大夫の車に上るを。

六三 鶴に託して自から辯ず

淡窓先生の鶴の詩に、朝遊雲水暮兼葭。島嶼洲汀總我家。但使此心無寵辱。何妨一上大夫車。といふのがある。これは『左傳』の中にある衛の懿公の故事を用ひたものである。懿公は頻りに鶴を寵愛して、大夫の位を與へ、大夫の車に乗せて喜んで居た。禽中の仙とも云はるゝ鶴が、大夫

の車に乗るのは、聊か不似合の感があるが、これも見やうに由ては、あまり批難する事もない。若し其心の中に、大夫の位を榮譽として、これを喜ぶの意あらば、鶴のために一種の墮落と云ふべきも、其心に榮譽恥辱の觀念がない已上は、一度位大夫の車に乗ても、何等の差支へもない筈である。先づ鶴に就ての詩の意味はこれまでである。

鶴に託して自から辯ず

然かし予は思ふに、尙ほ別に一種の意味があるらしい。それは先生は、二十四歳にして塾を開き、一生涯官途に就かず。風月を樂しみ、子弟を教育するを以て任務として居られた。其精神の高尙なるは誠に感ずべきである。然るに肥前の大村侯が、遙かに先生の徳を慕ふて、經書の講義を願はれた故に、先生は前後二回大村に赴いた。其

時大村侯は、非常な優遇をいたし、先生を待つに賓師の禮を以てし、送り迎ひには總て大夫の車を以てせられた。隱逸を以て任じて居る先生が、大夫の車に乗るのは、少しく異様の感がある。そこを先生が、鶴に託して自己の胸中を辨明し、但使此心無寵辱。何妨一上大夫車。と云はれたものではあるまいか。維新の初めに當り、大村の小藩

鶴に託して自から辯す

を以て、決然として勤王の軍に赴き、薩長土肥と相並ぶに至りしは、全く淡窓先生の教育により、大義名分を誤まらざりしに由る事と思ふ。鶴の話の序でに申して置くが、衛の懿公は、あまりに鶴を寵愛して、國民士卒を憐まざりしたため、敵國が侵入した時に、誰一人これを防ぐ者が無い。斯くて國民が云ふには、鶴に戦争をさせよ、日頃愛せら

讀方

飲啄相依る竹柵の中。
縞衣丹幘日に玲瓏。蛾眉國を傾くる人多少。千古の風流衛の懿公。

れ、大夫の車に乗せられて居るから、こんな時には、鶴が奮發すべきであると云ふて、誰も戦争をしない。これが爲めに、懿公は敵に殺され、終に國を亡ぼすに至つた。劉石秋の詩に、養鶴と題して、飲啄相依竹柵中。縞衣丹幘日玲瓏。蛾眉傾國人多少。千古風流衛懿公。といふのがある。古へより美人のために國を誤まつた人は澤山ある。

鶴に託して自から辯す

然かし鶴のために國を亡ぼすに至ては、千古其類がない。同じ國を亡ぼすにしても、亡ぼし方が極めて風流である、これが劉石秋の着眼點で誠に面白い。石秋は淡窓の上足の弟子であるが、師弟共に懿公の鶴を引き來て、各別の風趣を顯はして居る。世間では、家を傾け身を亡ぼすと云へば、必ず酒と女に限つたやうに思ふて居る。然

修養詩話

かし若し寵愛の方法を誤まるならば、鶴を愛し、蘭を愛し、詩歌に耽り、音樂に耽つても、随分家を傾くるに足る事である、深く注意せねばならぬ。

六四 遠帆樓の佳句

遠帆樓は、豊前の人、恒遠子達の家の號で、君も亦淡窓の門人である。その詩名は、劉石秋と相並んで、難兄難弟と云はれて居る。

遠帆樓の佳句

讀方

野雉は忽ち鞋底より起る。聲を曳て又没す菜花の西。

清香纒かに破れて雲なほ護し。淡影微かに浮んで月未だ知らず。潭は衆澗を呑んで聲常に怒り。松は孤峰を攫んで勢飛んと欲す。殘荷影は倒る開池の雨

其詩集は『遠帆樓詩鈔』と稱す。なかなか佳句が多い。春日出遊の詩に、野雉忽ち鞋底起。曳聲又没菜花西。といふのがある。古人の所謂ゆる、畫も亦詩に如かずとは、殆んど此種の詩であらう。梨花に曰く、清香纒破雲仍護。淡影微浮月未知。耶馬溪に云く、潭呑衆澗聲常怒。松攫孤峰勢欲飛。秋夜吟に曰く、殘荷影倒開池雨。繁杵

繁杵聲は流る深巷の風

聲流深巷風。と、幽閑雋逸の趣、古人の集中にても、多く得易からざるものである。

六五 病中の吟

光明寺爲然。は周防の人、眞宗本願寺派に屬す。才氣秀絶、器局之に稱ふ。嘗て赤松連城師と共に歐洲に遊び、伯林に在て學を修む。幾何もなくして病に罹り、療養効なく、空しく大志を抱て不歸の客となる。其

讀方

血を噴くの杜鵑郷萬里
雲を凌ぐの野鶴夢三春
生きてこの事なし死す
るに如かず。家に老親
あり猶ほ身を愛む。

病中の詩兩聯に曰く、噴血杜鵑郷萬里。凌雲野鶴夢三春。生無箇事不如死。家有老親猶愛身。此詩を讀む者、知ると知らざるを、齊しく涙なき能はず。

六六 文字媒を爲す

森田節齋は和州の人、山陽の門に遊び、文章を以て名あり。夙に四方の志を懐き、四十いまだ婦を迎へず。既に學成るの後、一

讀方

海内の文章阿誰に屬す
世間人は稱す節翁の奇
先生如し箕箒を執るを
許さば。半は良人と作
し半は師と作さむ。

日大阪に遊び、藤澤東咳に謁し、爲めに妻を媒せんことを請ふ。東咳曰く、汝望む所ありや。節齋曰く、其竊かに意を先生門下の無弦女史に屬すと。東咳乃ち其意を女史に通ず。女史詩を以て答へて曰く、海内文章屬阿誰。世間人稱節翁奇。先生如許執箕箒。半作良人半作師。これに由て婚約立るに成り。伉儷特に篤しと云ふ。

文字媒を爲す

六七 行に臨んで詩を賦す

蒲生重章は駿亭と號す、越後村松藩の人、夙に勤王の志を抱き、江戸に在て國事に奔走す、身仕途に在りと雖も、痛く開港論を駁して已まず。權門或は駿亭を捕へんと欲す。駿亭官を棄て身を花柳の間に隠し、以て危難を免がる。竊かに一律を賦して曰く、鷓鴣朝班奚足榮。妖氣漠々簇江城。好

讀方

鷓鴣の朝班奚んぞ榮とするに足らむ。妖氣漠々

讀方

々江城に簇がる。好し花柳を尋ねて嫌忌を避け。深く文章を秘して姓名を逃る。造物無情才子を嘗しめ。美人眼あり先生を識る。玉織袖を援へて留めて酒を温む。慰す我が胸中不平を抱くを。

一片の丹心誰に向つて

尋花柳避嫌忌。深秘文章逃姓名。造物無情窘才子。美人有眼識先生。玉織援袖留温酒。慰我胸中抱不平。幾何もなく藩主の召に應じ、國に歸て藩政に參す。既にして執政某の旨に忤ひ、忽ち放逐せらる。駿亭行に臨んで詩を賦し、以て懷抱を吐露す。

去國行

一片丹心向誰語。群鷄一鶴未得處。三

行に臨んで詩を賦す

語らむ。群鷄の一鷄未だ處を得ず。三宿晝を出づる濡滞と雖も。父母の國を去る君須らく恕すべし。道ふ莫れ鐵を把て大錯を鑄る。飄零客となるも亦惡しからず。満日の江山清淑の氣。吸ふて詩腸に入れて一に磅礴。俯省未だ必ずしも此生を誤らず。仰いで蒼天を見れば色轉た清し。俯仰我れ既に愧る所無し。青天白日放歌して行く

修養詩話

宿出晝雖濡滞。去父母邦君須恕。莫道把鐵鑄大錯。飄零作客亦不惡。満目江山清淑氣。吸入詩腸一磅礴。俯省未必誤此生。仰見蒼天色轉清。俯仰我既無所愧。青天白日放歌行。詩中の三宿出晝は『孟子』の語に基づく。孟子齊の宣王に説て用ひられず。乃ち國都を去り晝に於て三宿し然る後掉頭

して去る。晝は國都に近き邑の名なり。三宿して濡滞せる所以は、王の過ちを改め、己れを喚返さんことを待ちしなり。三日にして尙ほ何等の消息なし、是に於て孟子初めて齊を去るの志あり。今褻亭の詩に之を用ひたるは、頗る面白し。末段の白日青天の句に至ては、古への所謂ゆる狂者に類す。或人評して曰く、青天白日の句、奇は

行に臨んで詩を賦す

則ち奇なり。然れども、此氣象即ち執政の怒りに觸るゝ所以なりと。

六八 克堂陣中の詩

佐々友房は克堂と號す、肥後の人、慷慨にして氣節あり、明治丁丑の役、池邊吉十郎を佐け、藩士一千餘人を聚め、熊本隊を組織し、薩軍と同盟し、田原吉次の間に轉戦す。五月十六日、熊本城の圍み解くるや、西軍退い

讀方

雨は戰袍を撲ち風は沙を捲く。江山十里兩三家。壯圖一蹶無窮の恨。馬を立て、斷橋落花を看る。

て人吉城に據らんとす。敗軍の際、伏屍狼藉、呻吟の聲四方に滿つ、加ふるに梅天雨を翻へし、煙雨山岳を籠む、其慘言ふ可らず。克堂馬に騎し、途上小杜、秦淮夜泊の詩を微吟し、諸軍と共に人吉に赴く。既にして小杜の韻に次して曰く、雨撲戰袍風捲沙。江山十里兩三家。壯圖一蹶無窮恨。立馬斷橋看落花。その風流の情、欽すべし。克堂

讀方

歸來樽を開いて斗酒を酌む。笑つて戰袍を脱して彈痕を數ふ。

の吉次峠に在るや、戦ひ頗ぶる苦しむ。薩將篠原國幹終に此地に戦死す。當時克堂陣中に在て、七古一篇を賦す。其結に曰く、歸來開樽酌斗酒。笑脱戰袍數彈痕。豪壯の氣想ひ見るべし。槊を横へ詩を賦するの風、固より一世の雄たるに恥ぢずと言ふ可し。

六九 乃木將軍の清廉

乃木將軍恬澹無欲、唯だ軍務を以て事と爲す。日露の役、第三軍司令官に任じ、旅順の堅塞を抜き、奉天の敵背を衝く、其勇戰の狀、世界各國の稱讚する所となる。凱旋の日、天子黄金を賜て之を勞す。將軍敢て自から取らば、分つて部下の將士に與へ、一も餘す所無し。唐人劉長卿、李相公に獻するの詩あり。余今その領聯二句を假て、乃

乃木將軍の清廉

讀方

牙を建て角を吹て喧し
きを聞かず。三十壇に
登る衆の尊ぶ所。家は
萬金を散して士死に酬
ひ。身は一劍を留めて
君恩に答ふ。漁陽の老
將多く席を回ぐり。魯
國の諸生半ば門に在り
白馬翩翩春草綠に。邵
陵西に去て平原に獵す

木將軍小照の題辭と爲さんと欲す。詩に
曰く。

獻淮寧軍節度李相公

建牙吹角不聞喧。三十登壇衆所尊。家
散萬金酬士死。身留一劍答君恩。漁陽
老將多回席。魯國諸生半在門。白馬翩
々春草綠。邵陵西去獵平原。

七〇 梨花の佳句

讀方

當年限り無し三郎の恨
西内春は寒し雨一枝。

三原活山先生は豊後の人、諱は大受、活山
は其號なり。眞宗大谷派に屬す。幼にし
て學を好み、孜々として倦まず。初め長南
梁の門に遊び、後、宜園に轉じ、廣林外に師事
す。嘗て試場に在て梨花一律を賦す。そ
の七八に曰く、當年無限三郎恨。西内春寒
雨一枝。林外嘗て筑後に遊ぶ、人或は林外
に問て曰く、淡窓先生の在時、名士頗る輩出

梨花の佳句

修養詩話

す、今日の宜園は果して如何と。林外曰く、余の書塾を督してより、士風殆んど先人の時に及ばず。されど試場に在て、尙ほ此佳詩を作す者ありと。因て先生の詩を出し示す。是に由て先生の名宜園に喧しと云ふ。明治八年、本山の徴に應じ、侍讀監に任せられ、前法主の獅座に侍し、頗る輔導の誠を竭す。明治十二年、官を辭して家に歸

讀方

夜月煙を含む三逕の柳。春帆雨を帶ぶ五湖の舟。

る。詩あり其一聯に曰く、夜月含煙三逕柳。春帆帶雨五湖舟。是れより念を仕途に絶ち、家に在て私塾を開き子弟を教ふ。門に及ぶ者前後五百餘人。先生道を信ずること篤く、取舍苟くもせず。是に由て家計常に貧しく、饑寒殆んど支へず。先生また以て意と爲さず。明治二十七年、日清の役起るや、國論先生を擧て使節に任じ、廣島大本

營に赴き、天機を奉伺せしむ、先生家事を顧みず、即日程に上り、大本營に赴き、天子親征の軍勞を慰問し奉る。士論之を榮とす。明治四十四年十一月二十二日、病んで家に歿す。享年六十一。先生京師に在るの日、適ま西南の役起る。内閣顧問木戸公、憂憤病を作して薨す。東山靈山に葬る。先生當時公の墓に謁するの詩あり、左に録

讀方

山光映發す京城の東。雲は香魂を埋めて落暉紅なり。内閣顧問勳一等。贈正二位木戸公。威風凜凜として神在すが若く。天日長く照す公の誠忠。誠忠翼賛す中興の業。從容籌を運らす帷幄の中。一朝忽ち白雲に乗じ去る。唯恨む西征未だ功を奏せざるを。返魂香を焚げども魂返らず。三十六峰松柏の風。

出す。

謁木戸公墓

山光映發京城東。雲埋香魂落暉紅。内閣顧問勳一等。贈正二位木戸公。威風凜凜神在若。天日長照公誠忠。誠忠翼賛中興業。從容運籌帷幄中。一朝忽乘白雲去。唯恨西征未奏功。返魂焚香魂不返。三十六峰松柏風。

梨花の佳句

七一 知己遇ひ難し

古人云く、「詩を作る已に難し詩を讀む亦難し」と。余亦竊かに謂はんとす、「詩を讀む已に難し詩を作て知己に遇ふ更に難き者あり」と。竹田嘗て春詞十首を賦す、春陰に云く、雨餘風暖逼清明。天似將晴却未晴。蠶豆胡瓜栽恰好。才降種了即時生。山陽評して曰く、「此れ紈袴兒の知ら

讀方

雨餘風暖かにして清明に逼る。天は將に晴れんとするに似て却て未だ晴れず。蠶豆胡瓜栽る恰も好し。才かに種を降し了れば即時生ず

ざる所、君慎んで京洛の詩人に示す勿れ」と。竹田の如きは詩を作て知己に遇へりと謂ふべし。

七二 世事常に相反す

魏の信陵君士を愛して人に下る。食客三千人、皆珠履を着く、其恩遇の厚き知るべき也。秦の邯鄲を圍むや、平原君急使を馳せて救ひを信陵君に求む。信陵君これを

世事常に相反す

救はんと欲す、秦王聲言して曰く、邯鄲まさに陥らんとす、若し趙を救ふ者あらば、邯鄲陥るの後、先づ救ふ者を伐たんと。是に於て魏王後難を恐れ、信陵君の趙を救ふを許さず。當時信陵君の姉、平原君に嫁せり。救はんと欲すれば、魏王に負き、救はざらんとすれば、平原君に負く。是に於てか、信陵の智殆んど窮す。朱亥は魏の夷門を守る

者なり、當時年已に七十、自から信陵に謁し、趙を救ふの策を授く。且つ曰く、此行老臣固より従ふべし、されど年老いて行に堪へず、君軍を發するの日、臣死を以て送るべしと。信陵已に朱亥の策を用ひ、騎八萬を督して邯鄲の圍みを解き、以て千古の名を成す。信陵君發するの日、朱亥遙かに目送し、北向劍に伏して斃る。郁植、讀史の詩に云

讀方

兵は邯鄲を壓して氣吞んと欲す。時危くして公子監門に下る。滿堂の珠履三千の客。朱亥從來未だ思を受けず。

く、兵壓邯鄲氣欲吞。時危公子下監門。滿堂珠履三千客。朱亥從來未受恩。安祿山の反するや、河北二十四郡中、平原の大守顏真卿、主として義兵を起し賊を討す。張巡また兵を起し、睢陽城に據て賊を防ぐ、是に由て百萬の賊軍南下するを得ず。唐家再造の功は、一に真卿、張巡を推さざるを得ず。真卿舉兵の事朝廷に達するや、玄宗驚いて

讀方

當時識らず顔平原、豈また張睢陽あるを知らんや。

曰く、河北二十四郡一人の義士なきを恨みしに、今真卿の舉兵を聞く、朕平生、真卿の如何の人なるを知らずと。明人高青邱、張巡を祭るの詩に云く、當時不識顔平原。豈復知有張睢陽。帝已に顔平原を知らず、寧んぞ其下位に在る張巡を知らんや。嗚呼、養ふ所は用ふる所に非ず、用ふる所は養ふ所に非ず、余嘗て人主のために之を悲む。趙

世事常に相反す

讀方

一天の明月秋江の上。
惜む可し漁翁は詩を作
らす。

修養詩話

歐北漁父の詩に云く、一。天。明。月。秋。江。上。可。
惜。漁。翁。不。作。詩。詩を解する者は、概ね市塵
の間に埋没し、解せざる者は、却て蘆灣蓼洲
の景を恣にす。其居る所の者、世常に相反
するは何ぞや。余豈詩客のために之を悲
まざるを得んや。

修養詩話(終)

山茶花樓の懷舊

—(附録)—

山茶花樓の懷舊

安藤 荻洲

一 一心一佛

人。に。嫁。す。る。の。婦。女。は。我。が。夫。已。外。に。生。存。の。餘。地。を。見。る。可。ら。ず。如。來。に。歸。す。る。者。は。如。來。の。指。導。已。外。に。生。存。の。餘。地。を。見。る。可。ら。ず。我。が。夫。已。外。に。生。存。の。餘。地。を。見。る。者。は。窮。時。に。當。つ。て。夫。の。家。を。去。り。他。家。に。就。て。樂。地。を。求。め。ん。と。す。し。か。も。

(1)

附 録

(2)

實際の苦惱は此心より湧起す。如來の指導已外に、我が運命ある者と思惟せば、窮厄の時、苦惱に沈淪するを奈何せん。自己の全分を如來に託する者は則ち然らず。我家窮せり、如來は我を奮起せしめ玉ふ。我妻病めり、如來は我に、外物の恃む可らざるを知らしめ玉ふ。かくて我は平和を得て、心中聊かも憾むる所なし。(明治三十八年一月六日)

二 彈丸は偽善を許容せず

戰場に立つ人の信念は、極めて純白にして、且つ一點の偽

(3)

善なしと聞く。蓋し敵の彈丸は偽善を許さず、何如に沈毅安心の態度を示せばとて、彈丸は遠慮なく飛來するを以てなり。人或は酒肉の歡を得て、我れ幸福なりと云ふ。嗚呼偽善に非ずして何ぞや。生死無常の彈丸は、遠慮なく、此幸福の前に飛來するを奈何せん。(同一月十四日)

三 信仰に割引なし

信仰には、割引ある可らず、また懸値ある可らず。往生一定に非ざれば則ち地獄一定、地獄一定に非ざれば則ち往生

(4)

一定。コーランに非ざれば則ち劍劍に非ざれば則ちコーラン。自力他力の折衷に由て安心を得んとするは危険千萬なり。つき合せ物は他日開裂を生ずることを期せざる可らず。(同一月十六日)

四 實驗の詩歌

「この春は、どりで山のつぼすみれ、血潮まだらの花や咲くらん」とは、旅順の戦闘に参加せし中村少將の歌なりとぞ。別に奇あるに非ず、されど實感の歌なり。唯其れ實感

(5)

たり、故に人の肺腑を衝くもの深し。(同一月二十日)

五 我の安きは如來の御手の強きがためなり

旅宿の老婆、病床に在ること久し、此日子の室に入り來て曰く、安心せるが如くにして、また疑懼の念動く、手放し爲し難しと。我れ如來の大悲を説て曰く、自己の手を恃むなかれ、唯惡人攝取の、大悲の誓約の強きを信せよと。老婆曰く是にて大丈夫なり、今は心に懸る雲もなしとて引き下りぬ。變成男子とは、此の如き精神を形容せるにや。(同一月二十日)

六 澁柿

此夜澁柿二個を食す、澁の氣味跡を絶ちて、其風味言ふ可
らず。生のまゝにては手のつけられぬ澁柿も、手段を以て
澁を去れば、其佳味此の如し。人の心も研かば、なごや澁の
ぬけざらん。道に志す者、亦喻を取て可なり。(同一月二十三日)

七 如來の選擇

我は唯如來の指導に服従し、その範圍外に脱出すること
なきやうに勤むべし。何となれば、我れ如何に思慮を回ら

すとも、如來の指導以外に脱出す可らざればなり。エビク
テタス氏曰く、天道は我よりも善く選擇すと。我は凡てを
如來の選擇にまかせ、今よりして、未來の生活境遇を豫想す
るを已めん。嗚呼、我胸は開かれたり、感謝何ぞ堪へん。利
劍即是彌陀名號とは此意なるべし。如來を念するの一念
に、妄雲片々に破れ去る。(同一月二十九日)

八 内心の改革

稻葉先生の指導を請て、トルストイの『懺悔談』の研究

を始む。讀み始めより尤も趣味多し。此日歸寓の後、種々の感想起る。就寢後の感に曰く、絶對的内心の改革は、猛烈なる罪惡觀に基づかざる可らず。儒道及び其他の倫理は、吾人に、善良なれど教へ、また良心に従つて行動せよと教ふ。されど罪惡深重の人也と自覺せよとは教へず。ひとり宗教は、吾人に教ふるに、罪惡者なりとの自覺を以てす。是れ宗教の尊き所以なり。ルーテルやトルストイの内心の改革も、罪惡觀に基づくや明けし。眞正の罪惡觀は、眞正の革

命を喚起す。是れ所謂るエビクタスの「爾若し善ならんと欲せば、先づ爾の惡きことを信せよ」と教ふる所以也。

(同二月二日)

九 過ちを觀て仁を知る

此日城南の文中園にて、城山落城の薩摩琵琶を聽く、感特に深し。單に昔話とすればそれまで也、我身をして其時の南洲翁たらしめば、如何に處すべきかを思へば、修養の問題として仲々の價值あり。八千の子弟亂を爲して、南洲の之

を○棄○る○に○忍○び○ざ○り○し○は○渠○れ○が○深○く○子○弟○に○信○せ○ら○れ○し○が○た○
 め○の○み○信○せ○ら○る○が○故○に○棄○る○に○忍○び○す○孔○子○曰○く○「○過○
 を○觀○て○此○に○仁○を○知○る○」○と○南○洲○の○亂○渦○に○投○じ○子○弟○の○た○め○
 に○一○命○を○擲○ち○し○所○以○て○英○雄○の○心○懷○を○見○る○べ○し○人○心○の○感○
 應○は○斯○か○る○場○合○に○顯○は○る○も○の○也○勝○海○舟○伯○曰○く○「○己○れ○
 が○西○郷○な○ら○私○學○校○の○暴○動○が○起○つ○た○時○に○子○弟○を○棄○て○遁○げ○
 出○す○よ○そ○れ○を○遁○げ○な○か○つ○た○の○が○西○郷○の○西○郷○た○る○所○ぢ○や○」
 と○蓋○し○是○れ○自○己○を○小○に○し○て○地○下○の○友○人○を○讀○す○る○の○語○

一〇 人生は寒地を行くが如し

午後三時、校門を出で、歸寓の路に上る、寒氣凜烈言ふ可
 らず。予固と貧素、一外套を持せず。洋服も亦頗る古物、到
 底寒を防ぐに堪へず。同行の者四人あり、徐々談話して歩
 す。予は寒氣のため、到底徐歩するを得ず。則ち諸友に失
 禮し、疾行勇を鼓して去る。温氣身に生じて、纔かに蘇生の
 思ひあり。英人某曰く、「人○生○は○寒○地○を○行○く○が○如○し○徐○行○す○

れば則ち斃る意惰なれば身則ち病を生ず」と。嗚呼眞なり。(同二月七日)

一一 精神の榮養

同僚の一人、久しく喘息を病み、治癒の法を講ずること頗る切なり。人或は言ふ、猿の胎兒の黒焼にしたる物を、服すること三週日なれば、病必らず癒ゆと。此人百方苦心して黒焼を求め得、日々之を服す。但し此薬を服する期間は、一切の滋養物を禁止す。此人黒焼を服すること二十日、漸や

く服薬期を終へんとして、一朝頓に血を吐て死す。死生固より命有りと雖も、唯さへ衰弱の身を以て、長く榮養を絶ちしは、或は死因をなせしには非ざるか。肉體の榮養を缺けば、肉體斃れ、精神の榮養を缺けば、精神斃る。精神已に枯死して、幾何の生命を保ち得べきや。(同二月十日)

一二 三好長慶の連歌

三好長慶、既に四國を領し、五畿を従がへ、終に天下を併合せんとするの志あり。其弟三好之康、雞髮して實休と號し、

河内の國若江に居る。永祿五年三月五日、實休兵を出し、畠山高政根來寺の法師等と戰て、泉州久米田に戰死す。長慶此時飯盛城に在て連歌の會を催す。「すゝきにまじる葦の一むら」と云へる題句にて、之に附句を求め居たるが、すゝきは陸地に生ふるもの、葦は水中に生ふるものとして、諸人思案に苦しむ折しもあれ、實休戰死の敗報至る。長慶曰く、我れ急用起れり、願くば諸人の順番を越え、試みに附句をなさんと、則ち筆を執て曰く、「古沼のあさき方より野となりて、

すゝきにまじる葦の一むら」と。筆を投じて曰く、我が弟唯今戰死せり、いでや弔合戰仕らんと、一鞭加へ、諸鎧を合せて戰場に急ぎぬと。三好長慶の如きは、足利臣下の老賊固より稱するに足らず。されど其風流韻事と沈着の態度に至ては、自ら古英雄の風あり、吾れ此一事を没却するに忍びず。(同二月十六日)

一三 算盤以上の利益

老商某曰く、予少年の時より、長く商法に従事するに、算盤

に合はせんとする商法は、却て算盤に合はず。利益を度外に置き、専心一意其業に従事すれば、心中は平和にして、算盤に合ふこと不思議なりと。蓋し知言と云ふべし。必らず衣食を得んと欲すれば、苦惱多くして却て衣食を得ず。その足不足を論せず、凡ての違命を如來にまかせ、専心に業に従ふものは、一心平和にして、却て生活の餘地を得。いかに思慮を費せばとて、如來の指導以外には出る能はざるに非ずや。(同二月二十四日)

一四 意志の強弱

某師の訓話に曰く、酒や煙草のやめられぬと云ふは、唯決断なく猛志のなきがため也。監獄に行くものは、其日より禁酒禁煙を實行するに非ずや。されば、如何にしても已むる能はずと云ふ者は、能はざるに非ず、唯志のなきため也。(同二月二十八日)

一五 至誠人を動かす

明石掃部頭全澄、大阪落城の後、行衛不明なり。其臣澤原

孫太郎、關東軍に捕へらる。東兵之を拷問して、其主の所在を言はしむ。澤原曰く、士たる者、たとひその骨を粉碎さるればとて、言ふまじと誓ひしことを言ふべきやと。さらば拷問にかけよとて、詰問頗る慘を極む。澤原何事も言はずして、はら／＼と涙を流す。涙を流す上は、自白すると覺わたり、拷問をゆるめよとて、膝立て直して問ひかくれば、澤原曰く、諸君は此の如き運命に陥りたる時、拷問せらるれば、たやすく主人の行衛を自白するなるべし。さればこそ、拷問

に由て主人の行衛を問はんとするなれ。御心の程あまりに淺間敷覺わて、吾れ知らず涙のこぼれ候ふと申す。軍吏驚きて東照公に具陳す。照公曰く、此上は仔細なし、随分いたはり遣はせとて、禮を厚くして放ち去らしむ。至誠の人を動かすもの此の如し、教育に従事し、布教に従事し、感化の及ぶものなきは、辯論の足らざるに非ず、至誠のなきがためなり。(同三月五日)

一六 山に入て花を知る

熊澤蕃山嘗て芳野山に入り飽まで花を賞す。歌を詠じて曰く、「この春は吉野の山の山守となりてこそ知れ花の心を」と唯其境に至て其心を知るべし。道を信じ困難に處して始めて道の尊きを知る。如來を信じ人世に處して始めて信仰の眞味を知るべきのみ。いまだ信せずして宗教の如何を云爲するものあらば、我は斷じて與みせざるなり。(同三月六日)

一七 死中の生

人は生を求めんとして却て死を求め、樂を求めんとして却て苦を求む。盜に由て衣食の資を得、酒肉に由て歡樂を求むるが如き、皆此類に非ずや。其結果は求むる所と相反す、實に人の爲す可らざる所なり。哲人は死の問題を解決して、生活の天地を開墾す。是れソクラテス氏の、「哲學者は死の問題を解決すべきものなり」と教ふる所以なり。されば、樂は苦中に求む可し、生は死中に求むべき也。(同三月十日)

(22)

一八 子孫の衣食

老盜あり、妻と相坐して語る。妻泣然として泣て曰く、良人年齢已に傾けり。然るに我兒いまだ盜の道を知らず、一朝良人の此世を去るあらば、我が家系は斷絶せんとす、願くば良人生存の中に、我兒に秘傳を教へよと。老盜曰く、然らば汝の請ひにまかすべしとて、其夜直ちに兒を携へ、一の家を求めて忍び入りぬ。老盜先づ家中より行李を盗み出し、其蓋を開て曰く、兒よ此中に忍べと。かくて蓋を覆ひ、上

(23)

より繩をかけ終り、俄かに大聲を發して曰く、盜來る、盜來ると。家人驚起し、四方に賊を求む。老盜は早く已に我家に歸れり。家人盜を求むれども、盜已に在らず、唯行李の座中に在るを見るのみ。先づ其盜み去られざりしを喜び、之を倉中に運ばんとす。盜兒中に在て以爲らく、已に外より繩を施し、之を倉中に收めなば、我れ數日を出でずして餓死するの外なし、いかにして此重圍を脱すべきかと。終に一計を案じ、中より手を以て行李をかき鳴らし、飢鼠物をかむの

(34)

狀をなす。家人曰く、此中に鼠棲めり、速かに出さずんば、終に衣服を破り去らんと。則ち繩を解て蓋を去る。蓋を去るや否や、盜兒突出して庭に下る。家人相呼んで曰く、盜此に在りと。衆人奔つて庭を圍む、盜兒脱出の路なし。即ち庭石を取て井中に投じ、人、井中に落るの狀を爲す。井底の水洞然として聲あり。衆相謂て曰く、盜井中に陥ちぬと。乃ち繩を持し、梯を下して井中を窺ふ。盜兒開を得て、庭隅より脱出し、纒かに家に歸るを得たり。老盜曰く、汝如何に

(25)

して重圍を脱せしやと。兒具さに其狀を白す。父曰く、初陣としては上出来なり。由て妻を顧みて曰く、汝常に愚痴をこぼして曰く、良人若し此世を去らば、兒は如何にして父の職を受け續くべきやと。されど今夜實地を以て試みるに、初陣としては仲々の上出来なり。人は實地の場に臨めば、何とか工夫もつくものなり、我れ今死するも思ひ残すことなし。汝今日以後、また子孫の謀を言ふ勿れと。陋巷の小話、固より信を置くに足らず。されど、眞理は嚴然として

其中に存す。清澤先生曰く、我が生きん程は、妻子の衣食を先きにし、彼等を憐むべし。我れ死せん後は、妻子はいかにかして衣食の道を得べし。何となれば、如來は彼等に必要なる衣食を給し玉ふこと必然なればなりと。古へ言ふ、「君子は義にささる、小人は利にささる」と。我等、この小話に由て、道にささるを得ば、毒藥變じて藥となるべきなり。

(同三月十一日)

一九 兒を知るは親に如かず

元和元年、大阪夏陣の時、五月六日の、天王寺口の合戦に、眞田幸村、伊達政宗の軍勢を打破り、士卒を固めしづく、と引上て、毛利勝永の陣所に來る。幸村の一子大介、今年十六歳なるが、今日の戦ひに、伊達の軍勢と組討して、討取たる首を、鞍の四方手に結びつけ、手傷を負ひたるが、流るゝ血潮を拭ひもせず、勇氣凜然として馬を歩ませけるを、勝永一目見て、あはれ父の子なりと感じけり。明くる七日に、幸村兵を出しけるが、今日を最後の軍なれば、秀頼の出馬を乞はんため、

大介を城中に使はしけり。大介曰く、我れ十六に及ぶまで、片時も父のかたへを離れたることなし。唯今討死の際に、逃げたりと人に言はれんこといと口惜しく候。去年母上に別れし後、文のたよりに仰せらるゝには、ながらへて相見んことは願はしけれど、合戦の場にては、必ず父上と同じ枕に討死せよ。武士は、かりにも名こそおしけれと誠められぬ。まげて父と同じ戦場に伴ひ玉へと云ふ。幸村曰く、我れ汝を城中に遣はすは、秀頼公の御ためなり。父子兩人、とても

のがるべきや。やがて冥途にて逢ふべきを、暫しの別れを惜むこそ口惜しけれとくく参れとて、取りつきたる手を引放せば、大介名残惜しげに父を見て、さらば冥途にてこそとて引返す。幸村、大介を見送りては、ふり落る涙をおさへ、昨日の合戦にて、手を負ひながら、よわる體も見えざれば、まもや最後に、人に笑はるゝ如き事は、あらし、健げな戦死を遂げんこと、必定なれば、我も今は心安しとて、馬の首を引返し、戦場に向ひけるとぞ。落城の時、大介終に秀頼の傍に死す。

古への武士は、我兒が戰場に臨んで、健げなる戦死を遂げざらんことをのみ是れ懼る。今の人は、我が死後に於て、妻兒が暖衣飽食を得ざらんことをのみ是れ懼る。懼るゝ所以のもの大に異れり。道に志す者、深く反省せざる可らず。
(同三月十一日)

二〇 唯佛一道

浩々洞の家主若井某嘗て予に語つて曰く、我に一人の愛兒ありけるが、五六歳の時大に病む。幸に家計に不足なけ

れば、醫士を聘すること五六人、然るに醫師の間に異論を生じ、各見る所を主張す。紛争數日に及び、互に藥を投せず。已むを得ず、之を大學病院に送りけるに、時機已に後れ、愛兒は終に黄泉の客となりぬ。我今行年六十、家に數萬の富なきに非ざるも、そを傳ふべき一兒のなきを奈何せんと。蓋し是れ人世の慘事なり。安心の法は唯一道に由るべし。一心一向、唯佛一道、信心爲本、皆この安心の道を示せるもの也。衣食の道を黄金に謀り、家の方角を稻荷に謀り、病のことを

観音に謀り、未來のことを如來に謀り、昨日の思想は今朝變り、今朝の思想は夜に至て亦變ず。かくて八方に相談して、思想の紛争を起す人、其胸中の苦惱察するに餘りあり。我等は唯彌陀一佛を信するにて足れり。人生も未來も、唯念佛の一道を進めば足れり。法然上人曰く、「阿彌陀佛といふよりほかは津の國のなにはのこともあしかりぬべし」。

(同三月十四日)

二一 我心の變化

煩惱具足の凡夫、火宅無常の世界は、よろづのこと、みなもてそらごとたわごと也との聖訓、今は一層身にしみて難有く覺ゆ。煩惱の心變じ易く、昨日の雲、今朝の雨となる。そら事に非ずして何ぞや。凡夫の心に、恃むべき所いづくにかある。唯念佛のみぞまことにてまします、是より外に、我等は絶対に信賴すべきものなし。(同三月十六日)

二二 佛は是れ醫王

此日微痾あり、醫師に就て藥を求め、入浴の後徐ろに枕に

就く、其快言ふ可らず。病に罹て醫師に遇はざるは身體の不幸なり。精神上の病に遇ふて、之を慰安すべき醫師に遇はざるは、人生苦中の最苦なり、其慘比すべきものなし。佛曰く、「我は猶醫王の如し、病を知て薬を説く、飲むと飲まざるは醫の罪に非ず」と。嗚呼意味あるかな聖訓、薬は已に枕頭に在り、飲まずして苦しむ者あらば、佛力と雖も、其れ之を奈何かすべき。(同三月十八日)

二三 千里の平原

寸毫も餘裕なきことを、「雪隠に槍を使ふが如し」と云ふ。信心は、我心を千里の平原に置くもの也。今にも自殺して、我罪の懺悔をしたしと思ふ時も、一心如來に歸れば、嗚呼、我は誤れり、佛の大悲は誰が爲めぞや、我に切腹の勇あらば、なご其勇氣を、人世のために盡さる。如來は、凡ての責任を負ひ玉ふに非ずや、惡人救濟とは、我一人のためならずやと。一念此に至れば、一枝の筆を執るも、三間の槍を執りて、千里の平原に揮ふの概あり、振へども振へども、更に障碍

する處なし。(同三月二十日)

二四 謠の三病

觀世左近は、戰國時代に於ける謠曲の大家なり。左近嘗て人に語つて曰く、謠に三病あり、聲音の美しきと、覺悟の善きと、拍子の調ひたるとなり。此三病一つにてもあらば、此人謠ひに熟達する能はず、必らず中途にて休むものなり。謠の道に限らず、凡て器用なるものは、其器を恃むが故に、工夫を積まず、思慮を勞せず、故に藝の奥義を曉りがたしと云

はれしとぞ。人或は曰く、我は推理の力なき故、到底算術を善くする能はず。我は記憶の力乏きが故に、到底語學に熟する能はずと。若し左近をして聞かしめば、必らずや志なき人と言はん。(同三月二十二日)

二五 自名の投票

加藤清正嘗て國中の士に令し、母衣ほろの士二十人を定めんとて、其適任者を投票せしに。阪川忠兵衛と云ふ者あり、自名を書して投ず。清正召して之を詰る。渠れ徐ろに答へ

て曰く、他人の適不適は、容易に分り兼るもの也。親子の間
 と雖も、明日親の心のいかに變り行くやを知らず、況んや他
 人をや。今日忠義らしく見わたりとて、他日戰場にて、卑怯
 の振舞なきを保せず。されど我自ら思ふに、若し母衣の士
 に舉げられて、其職務勤まらずば、腹かき切て死せんと思ひ
 定めたり。されば今回の投票に、他人のことはともあれ、一
 人の適任者は我と思ひし故、自名の投票をいたしぬと申
 す。清正感嘆、碌を増して母衣の士に舉げたりとぞ。宗教

二六 戀愛の懺悔

の上に、罪惡の自覺と云ふことあり。經文に惡人とあるが
 故に、我は惡人ならんと言ふ人あらば、此人いまだ宗教の門
 戸に近づかざるなり。眞の罪惡觀は自覺なり、たとひ他人
 より、爾は惡人に非すと辯護せらるるも、我は罪惡のいたづ
 ら者也と信するに至て、始めて佛力他力に乘託するを得べ
 き也。罪惡觀は自名の投票なるを要す。(同三月二十三日)

京都岡崎の邊に假の名を笹の家と號する人あり。身は